

# 研究成果報告：

## 近世朝廷文化研究の進展をめざして（覚書）

### —日本史と隣接分野の研究状況と今後の展望—

若松正志

#### 要旨

近年、日本近世史の分野では、天皇・朝廷の研究が大きく進んだ。たとえば、朝廷と江戸幕府との関係の歴史的展開、朝廷の内部構造など、政治的・社会的なことがらに加え、天皇や公家の日常生活や文化活動についても、具体的な様子がわかってきた。しかし、朝廷の文化は、実に多彩である。それらを総合的にとらえるためには、国文学、美術史、芸能史、宗教史など、隣接する諸分野の研究の視点・方法・成果を学ぶ必要がある。

本稿は、以上の認識から、近世朝廷文化研究を進めるための第一歩として、日本史及び隣接分野における研究状況について要点をまとめ、さらに今後の展望について述べたものである。

キーワード：近世日本の朝廷文化、日本史、和歌、美術史、芸能史

#### はじめに

本稿は、近世日本の天皇・朝廷研究、特にその文化を明らかにするためには、日本史の隣接分野の研究（視点・方法・成果）も組み入れて行う必要があるという認識のもと、それらの研究状況について要点をまとめ、今後の展望についても述べたものである。

近年、近世日本の天皇・朝廷に関する研究は、関係史料の公開・出版、電子化・データベース化などによって、大きく進んだ<sup>1)</sup>。たとえば、朝幕関係（天皇・朝廷と江戸幕府との関係）の展開、朝廷の内部構造など、政治的・社会的なことがらに加え、天皇や公家の日常生活や文化活動についても、その具体的な様子がわかるようになってきた。しかし、朝廷の文化は、実に多彩である。それらを総合的にとらえるためには、国文学、美術史、芸能史、宗教史など、日本史と隣接する分野の研究（視点・方法・成果）を学ぶことが重要である。

本稿は、以上の認識から、近世朝廷文化研究を進めるための第一歩として、日本史及び隣接分野における研究状況について、まずは要点をまとめることにする。

最初に、日本史の研究状況（宗教史を含む）を述べ、続いて、国文学（和歌）、美術史、芸能史などについて、主要なトピックスをあげて見ていくことにしたい。いまだうまく把握できていない点や見落としがあるものと思うが、いろいろご教示をたまわることができれば幸いである。

## 1 日本史における近世天皇・朝廷研究

日本史（日本近世史）の分野において、天皇・朝廷研究が本格的に行われるようになったのは、1970年頃からである。文部省の教科書検定での江戸時代の天皇は「君主」であるという指摘、そして幕藩制国家論・近世国家論の提起により、近世社会における天皇・朝廷の役割・位置を研究する必要性が意識され、研究が進められた<sup>2)</sup>。このような事情から、当初は、いわゆる朝幕関係など、政治的な面を中心に研究が進められた<sup>3)</sup>。やがて、これと並行して、朝廷の内部構造についても研究が行われるようになった。そこでのキーワードのひとつが「家職」であり、朝廷を構成する様々な人や集団について研究が進められ、朝廷に関わる宗教・宗教者についての研究成果も出た<sup>4)</sup>。

このような流れのなかで、日本史研究者による近世の天皇・朝廷の文化に関する研究は多くはない。京都研究のなかで文化に着目した林屋辰三郎氏<sup>5)</sup>、そして後水尾天皇や寛永文化、茶の湯などの研究を進めた熊倉功夫氏<sup>6)</sup>が代表的な先駆的研究者であり、近年では松澤克行氏が和歌や茶の湯など多彩な成果を出している<sup>7)</sup>。このほか、鍛冶宏介氏が文学・文化に関する論文などを発表しており<sup>8)</sup>、また筆者も朝廷の和歌などに関わる論文を出している<sup>9)</sup>が、やはり日本史研究者による近世天皇・朝廷研究のなかで、文化研究は非常に少ないのである<sup>10)</sup>。

## 2 国文学における近世天皇・朝廷研究

国文学の分野においても、近世の天皇・朝廷に関わる研究が活発になったのは、それほど古いことではないようである。1989年刊行の『近世堂上和歌論集』の序文「『近世堂上和歌論集』の刊行に寄せて」で島津忠夫氏は、この論集に17人・18本の論文が掲載されたことについて、「十年前にはまったく考えられなかったこと」と記している。和歌史研究会の同人（メンバー）が中古・中世の専攻者に限られており、近世の和歌研究は低調だったことがうかがえる。氏によれば、近世の和歌については、かつては佐々木信綱・福井久蔵・能勢朝次氏らの単著があり、研究も進んでいたこと、その頃は近世でも前期より後期が、堂上（とうしょう。天皇・公家）よりも松永貞徳から広がる地下（じげ。ここでは武士や町人など）が注目されていたことなどが記されている<sup>11)</sup>。同書はもうひとつ、井上宗雄氏の序文もあるが、そこでは近世和歌研究における資料の入手の難しさが指摘されている。近世は勅撰集の編集がなくなった時代であり、和歌研究の基本資料である歌集などの整理・翻刻も、近世については進んでいない状態だったのである。そのような状況のなか、この論集が刊行され、ここに執筆している研究者が、その後それぞれ研究を深めていったものと思う。

以下、近世の天皇・朝廷の文化で重要な和歌や古今伝授（授）に関する代表的な研究成果を、著書を中心に、刊行（発表）順にあげる（\*は『近世堂上和歌論集』の執筆者である）。

横井金男『古今伝授の史的研究』（臨川書店、1980年）

\* 鈴木健一『近世堂上歌壇の研究』（汲古書院、1996年。増補版、2009年）

\* 日下幸男『近世古今伝授史の研究 地下篇』（新典社、1998年）

\* 久保田啓一『近世冷泉派歌壇の研究』（翰林書房、2003年）

\*高梨素子『後水尾院初期歌壇の歌人の研究』（おうふう、2010年）

さらにその後、新たな観点や新しい世代の研究者も含め、多くの著作がまとめられている。

松野陽一『東都武家雅文壇考』（臨川書店、2012年）

盛田帝子『近世雅文壇の研究—光格天皇と賀茂季鷹を中心に—』（汲古書院、2013年）

\*日下幸男『中院通勝の研究—年譜稿篇・歌集歌論篇—』（勉誠出版、2013年）

\*高梨素子『古今伝受の周辺』（おうふう、2016年）

\*日下幸男『後水尾院の研究—研究編・資料編・年譜稿—』（勉誠出版、2017年）

飯倉洋一・盛田帝子編『文化史のなかの光格天皇—朝儀復興を支えた文芸ネットワーク—』（勉誠出版、2018年）

海野圭介『和歌を読み解く 和歌を伝える—堂上の古典学と古今伝受』（勉誠出版、2019年）

青山英正『幕末明治の社会変容と詩歌』（勉誠出版、2020年）

酒井茂幸『禁裏本歌書の書誌学的研究—蔵書史と古典学—』（新典社、2021年）

\*高梨素子『後水尾院御会研究：付『伊勢物語聞書』翻刻』（新典社、2022年）

日高愛子『飛鳥井家歌学の形成と展開』（勉誠出版、2022年）

\*鈴木健一『近世文学史論—古典知の継承と展開—』（岩波書店、2023年）

基礎的作業として歌集<sup>12)</sup>や歌会の調査を踏まえた成果が次々として出されている。そして堂上和歌の広がり（庶民や武家へ、京都から地方へ）についても、上記の久保田啓一著書・松野陽一著書・盛田帝子著書などで扱われている。

また、単著としてはまとめられていないが、小高道子氏<sup>13)</sup>や杉本まゆ子氏<sup>14)</sup>にも古今伝受に関する注目すべき研究成果がある。

以上、国文学研究者による近世天皇・朝廷の和歌研究について概観した。特徴として指摘できるのは、近世前期が中心であることである。天皇でいえば、後水尾天皇（上皇）から靈元天皇の時期に研究が集中している。近世中期以降では、盛田帝子氏の著書や飯倉・盛田編書、近代をみすえた青山著書など、まだ少数にとどまっている。ただし、著書・編書以外にも目を向けると、もう少し成果があるように思う<sup>15)</sup>。

なお、和歌以外では、連歌についても検討する必要があるが、またの機会としたい。

### 3 美術史における近世天皇・朝廷研究

続いて、近世の天皇・朝廷の美術に関する研究をあげる<sup>16)</sup>。

美術史においても、近世の天皇・朝廷に関する研究は、これまではそれほど活発ではなかったように思う。日本史の教科書でも、古代・中世の美術は、天皇・貴族あるいは寺社に関するものが多く、朝廷との関わりがみられるが、近世とくに江戸時代の中後期は喜多川歌麿・東洲斎写楽・葛飾北斎・歌川広重・歌川国芳などの民衆にも広まった浮世絵に注目が集まっている。中世後期から近世初期については、狩野派や本阿弥光悦・俵屋宗達・尾形光琳など京都の画家・作品もあるが、狩野派が探幽

以降江戸幕府の御用絵師となり、上記の本阿弥光悦以下は京都の上層町人のイメージが強い。京都ではその後も、円山応挙・呉春・伊藤若冲・原在中など有名な画家が多くいるが、彼らも町人のイメージである。しかしながら、これらの絵師たちは朝廷（天皇や公家）との交流もあり、またより強い関係をもつ絵師たちもいる。

近世京都の絵師に関する研究を見ると、比較的早い時期に概観したものに京都市文化観光局文化財文化財保護課編『近世の京都画壇—画家と作品—』（京都市文化財ブックス7）（同、1992年）があり、網羅的なものとして、京都文化博物館でおこなわれた特別展「京の絵師は百花繚乱—『平安人物志』にみる江戸時代の京都画壇—」（図録が同学芸第一課編『同題』京都文化博物館、1998年）が、京都御所の障壁画に焦点を当てた、京都国立博物館での特別展「京都御所障壁画—常御所と御学問所—」（図録が、京都国立博物館他編『同題』京都新聞社、2007年）があり、京都の絵師と公家との関係にふれているものもある<sup>17)</sup>。

そして近年まとめられたのが『天皇の美術史』全6巻で、4巻（著者は野口剛・五十嵐公一・門脇つみ）が江戸時代前期<雅の近世、花開く宮廷絵画>、5巻（著者は五十嵐公一・武田庸二郎・江口恒明）が江戸時代後期<朝廷権威の復興と京都画壇>（ともに、吉川弘文館、2017年）である。両書も、御所の造営・障壁画を1つの柱とし、障壁画に制作に関わった絵師や宮廷絵画に注目している。幕府財政との関係で江戸時代中期以降の御所造営（障壁画制作）には京都の絵師も動員（選考あり）されたが、そのあたりの叙述は興味深い。また、狩野派は探幽以降、幕府御用絵師となるが、京都に残った京狩野に関する研究も進んできている<sup>18)</sup>。

#### 4 芸能史における近世天皇・朝廷研究

芸能史に関しては、茶道、華道、香道、能楽、雅楽などがあげられる。

茶道については、千利休以降、織田信長・豊臣秀吉など武家と上層町人を中心に広まったというイメージがある。天皇・朝廷の茶道についてはあまり研究がないが、谷端昭夫『公家茶道の研究』（思文閣出版、2005年）が重要である。谷端氏は、茶の湯文化学会編『講座 日本茶の湯 全史』第2巻<近世>（思文閣出版、2014年）で「近世茶の湯研究の手引き」も執筆しており、17世紀初頭・前半・後半、18世紀前半・後半、19世紀前半と、時期ごとにその特徴と資料にふれている。前掲『天皇と芸能』<天皇の歴史10>では、松澤克行氏が「天皇の茶の湯」を執筆している。そして近年、依田徹『皇室と茶の湯』（淡交社、2019年）が出た。近世では前期を中心に、皇室（後水尾院・後西天皇・八条宮家など）と茶の湯の関係を紹介している。

華道・香道・能楽・雅楽については、それなりに著書・論文などが出ているが、天皇・朝廷に焦点をあてたものは少ないように思う<sup>19)</sup>。今後、調査を進めたい。

#### おわりに

以上、近世日本の天皇・朝廷文化に関してジャンル別に研究状況を述べてきた。近世の天皇・朝廷

の印象が薄かったこともあってか、各ジャンルとも古くから十分な研究蓄積があったわけではないが、近年研究が進んだこと、そしてそれぞれの現在の到達点がある程度概観できたものと思う。もっとも、注3)でも述べたように、この区分は便宜的なものである。また、このようなジャンルで分けるのではなく、時期別あるいは寛永文化などのテーマ別に研究状況をまとめることも考えられるだろう。たとえば寛永文化についていえば様々な専門分野の方による共同研究もみられ、充実した成果がある<sup>20)</sup>。このほか、ふれることができなかった建築・庭園などについても、今後に期したい。

最後に、今回の作業との関連で、私が現在取り組んでいる親王研究についてふれ、結びとしたい。近世の親王は、近世の天皇以上に印象が薄い存在である。しかし、たとえば、和歌について見るとまず、古今伝授（受）について、八条宮智仁親王・有栖川宮職仁親王・閑院宮典仁親王など、重要な役割を果たした親王がいたことは、すでに別稿<sup>21)</sup>でも指摘した通りである。また八条宮智仁親王や妙法院宮真仁法親王が和歌に関する文化サークルで活躍したこともよく知られている<sup>22)</sup>。親王は門跡（内親王は尼門跡）となった者も多く、宗教面も重要である。これらを踏まえ、親王研究についてもさらに進めていきたい。

## 注

- 1) 具体的には、『天皇皇族実録』全136巻（ゆまに書房、2005～17年）の出版が大きく、さらに『四親王家実録』全57巻（ゆまに書房、2015～20年）も刊行された。このうち、前者は東京大学史料編纂所の近世編年データベース（<https://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/w33/search>）で検索ができる。ほかにも、国文学研究資料館など、史料の画像データが公開されている機関も多く、それらを把握すること自体が、重要になってきている。
- 2) 日本近世史における天皇・朝廷研究の動向をまとめたものとして、以下の研究を参考にさせていただいた。久保貴子『近世の朝廷運営—朝幕関係の展開—』（岩田書院、1998年）序章「近世朝幕関係史研究の課題」（1989年発表論文を改稿）、山口和夫『近世日本政治史と朝廷』（吉川弘文館、2017年）序章「近世日本政治史と天皇・院・朝廷—研究史と主題—」
- 3) 代表的な研究として、次のものがある。以下、専門書を中心に便宜的に区分して記していくが、実際には、それぞれ多様な内容を含んでいるものもあり、あくまでも一つの区分であることをお断りしておく。
  - ・宮地正人『天皇制の政治史的研究』（校倉書房、1981年）
  - ・高埜利彦『近世日本の国家権力と宗教』（東京大学出版会、1989年）
  - ・辻達也編『天皇と将軍』＜日本の近世2＞（中央公論社、1991年）
  - ・深谷克己『近世の国家・社会と天皇』（校倉書房、1991年）
  - ・久保貴子前掲（注2）著書
  - ・藤田覚『近世政治史と天皇』（吉川弘文館、1999年）
  - ・橋本政宣『近世公家社会の研究』（吉川弘文館、2002年）
  - ・野村玄『日本近世国家の確立と天皇』（清文堂、2006年）
  - ・田中暁龍『近世前期朝幕関係の研究』（吉川弘文館、2011年）
  - ・田中暁龍『近世朝廷の法制と秩序』（山川出版社、2012年）
  - ・村和明『近世の朝廷制度と朝幕関係』（東京大学出版会、2013年）
  - ・高埜利彦『近世の朝廷と宗教』（吉川弘文館、2014年）

- ・野村玄『天下人の神格化と天皇』（思文閣出版、2015年）
  - ・佐藤雄介『近世の朝廷財政と江戸幕府』（東京大学出版会、2016年）
  - ・山口和夫前掲（注2）著書
  - ・長坂良宏『近世の撰家と朝幕関係』（吉川弘文館、2018年）
- 4) 宗教関係も含め、朝廷（宮廷）社会の研究の代表的なものをあげる。
- ・高埜利彦前掲『近世日本の国家権力と宗教』
  - ・柚田善雄『幕藩権力と寺院・門跡』（思文閣出版、2003年）
  - ・高埜利彦編『朝廷をとりまく人びと』〈身分的周縁と近世社会8〉（吉川弘文館、2007年）
  - ・井上智勝『近世の神社と朝廷権威』（吉川弘文館、2007年）
  - ・西村慎太郎『近世朝廷社会と地下官人』（吉川弘文館、2008年）
  - ・梅田千尋『近世陰陽道組織の研究』（吉川弘文館、2009年）
  - ・高橋博『近世の朝廷と女官制度』（吉川弘文館、2009年）
  - ・高埜利彦前掲『近世の朝廷と宗教』
  - ・田中暁龍『近世の公家社会と幕府』（吉川弘文館、2020年）
  - ・林大樹『天皇近臣と近世の朝廷』（吉川弘文館、2021年）
  - ・石田俊『近世公武の奥向構造』（吉川弘文館、2021年）
  - ・間瀬久美子『近世朝廷の権威と寺社・民衆』（吉川弘文館、2022年）
- 5) 林屋辰三郎『中世文化の基調』（東京大学出版会、1953年）所収「寛永文化論」など。
- 6) 熊倉功夫『後水尾院』〈朝日評伝選〉（朝日新聞社、1982年）。その後、『後水尾天皇』と改題して〈岩波同時代ライブラリー〉（岩波書店、1994年）、さらに〈中公文庫〉として、2010年刊行。熊倉功夫『寛永文化の研究』（吉川弘文館、1988年）。増補して『熊倉功夫著作集』第5巻〈寛永文化の研究〉（思文閣出版、2017年）
- 7) 松澤克行『近世の天皇と芸能』（渡部泰明・阿部泰郎・鈴木健一・松澤克行『天皇と芸能』〈天皇の歴史10〉（講談社、2011年。講談社学術文庫、2018年）ほか。
- 8) 鍛冶宏介『江戸時代教養文化のなかの天皇・公家像』（『日本史研究』第571号、2010年）
- 9) 若松正志『近世中後期における朝廷文化の広がり』（『日本史研究』第702号、2021年）
- 10) なお、藤本清二郎『和歌の浦・玉津島の歴史—その景観・文化と政治—』（和泉書院、2019年）など、地域史としての成果もいくつかあり、自治体史にも目を向ける必要がある。ここで、あらためて日本近世史研究において天皇・朝廷の文化に関する研究がそれほど行われてこなかった理由を考えてみたい。ひとつには、日本史研究者の天皇に対する意識の問題があるように思う。すなわち、天皇・朝廷文化の研究は、日本の伝統文化及びその中心にある天皇の意義・役割を高く評価することにつながり、それは戦前の天皇中心の国家体制、そして天皇制の肯定につながるのではないかという、複雑な思いがあったのではなかろうか。このことは、近世の文化といえは、元禄時代の上層中心の町人文化、それ以降の江戸を中心とする庶民文化が注目されてきたこととも関わるように思う。すなわちこれまでの日本史研究者は、天皇・朝廷の雅びな文化よりも、町人や村人、庶民の世俗的な文化を重視する傾向があったことと重なるものだと思う。
- 11) 近世堂上和歌論集刊行会編『近世堂上和歌論集』（明治書院、1989年）
- 12) 近世の天皇・朝廷の和歌・歌集に関する資料として、代表的なものをあげる。
- 『列聖全集』編纂会：同編『列聖全集』7～12巻（1916年）。普及版が『皇室文学大系』第3輯（名著普及会、1979年）
- 明治書院：\*上野洋三編『近世和歌撰集集成』全3巻（1985～88年）、宮内庁書陵部編『智仁親王詠草類』（1999～2001年）

古典文庫：\*高梨素子編『烏丸資慶家集』上・下（1991年）、\*島原康雄編『飛鳥井雅章集』上・下（1992・94年）、橋りつ編『烏丸光廣集』上・下（1994・96年）、\*高梨素子編『烏丸資慶資料集』（1996年）、\*島原泰雄・\*鈴木健一・湯浅佳子編『近世堂上千首和歌集』上・下（1997・98年）、\*高梨素子編『中院通村家集』上・下（2000年）、中川豊編『烏丸光栄関係資料集』（2002年）、\*高梨素子編『中院通村詠草』（2002年）

岩波書店：\*上野洋三・松野陽一校注『近世歌文集』上・下＜新日本古典文学大系＞（1996・97年）

笠間書院：\*高梨素子編『後水尾院講釈聞書』（2009年）

和泉書院：\*日下幸男編『類題和歌集』（2010年）

さらに一般書としては、次のものがある。

\*高梨素子『松永貞徳と烏丸光広』＜コレクション日本歌人選＞（笠間書院、2012年）

\*鈴木健一『天皇と和歌―国見と儀礼の1500年―』（講談社選書メチエ、2017年）

・盛田帝子『天皇・親王の歌』＜コレクション日本歌人選＞（笠間書院、2017年）

\*高梨素子『後水尾院時代の和歌』＜新典社選書＞（新典社、2021年）

13) 小高道子氏（\*）の主な研究を、対象としている時期順にあげる。

・「東常縁の古今伝受―伝受形式の成立―」（『和歌文学研究』44、1981年）

・「近衛尚通の古今伝受一切紙伝受を中心に―」（『中京大学文学部紀要』51-2、2017年）

・「細川幽斎の古今伝受―智仁親王への相伝をめぐって―」（『国語と国文学』57-8、1980年）

・「関ヶ原の戦と古今伝受」（『国語と国文学』58-11、1981年）

・「御所伝受の背景について―古今伝受後の智仁親王―」（『近世文藝』38、1983年）

・「御所伝受の成立について―智仁親王から御水尾天皇への古今伝受―」（『近世文藝』36、1982年）

・「智仁親王の源氏物語研究」（『中古文学』63、1999年）

・「御所伝受の成立と展開」（近世堂上和歌論集刊行会編『近世堂上和歌論集』明治書院、1989年）

・「御所伝受と古今伝受後奉納和歌」（『中京大学文学部紀要』53-1、2018年）

・「古今伝受から御所伝受へ―歌神と古今伝受後奉納和歌―」（小高道子・鶴崎裕雄編『歌神と古今伝受』和泉書院、2018年）

14) 「御所伝受考―書陵部蔵古今伝受関係資料をめぐって」（『書陵部紀要』58、2006年）、「閑院宮和歌資料：閑院宮御会短冊を中心に」（『書陵部紀要』65、2013年）

15) たとえば、飯塚ひろみ氏は、東山御文庫蔵『後桜町院天皇御製』を使って、内親王時代の和歌について11回にわたり、また天皇になってからの和歌についても4回にわたって、翻刻・解説・分析している（「東山御文庫蔵『後桜町院天皇御製』内親王時代の和歌」（『藝林』65-2～70-2、2016～21年）、「東山御文庫蔵『後桜町院天皇御製』（宸翰）の紹介と翻刻（翻刻と解説）：後桜町院天皇の和歌活動」（『京都産業大学日本文化研究所紀要』第12・13合併号、14、16、17号、2008、09、11、12年）など）。

さらに近代の和歌については、松澤俊二『越境する近代11「よむ」ことの近代―和歌・短歌の政治学』（青弓社、2014年）もある。

16) この部分に関しては、京都産業大学京都文化科学研究科の大学院生の中村遼氏からご教示いただいたところがある。感謝申し上げます。

17) たとえば、武田恒夫氏は、前掲『近世の京都画壇―画家と作品―』の序文で、江戸時代前期の京都画壇の有力な支持層として、九条家（京狩野派）、二条家（尾形光琳）、近衛家（渡辺始興）などの公家、万福寺（池大雅）、青蓮院（青木木米）、本願寺・妙法院（円山応挙）、相国寺・鹿苑寺（伊藤若冲）などの社寺をあげている。また、佐々木丞平「京都御所と十九世紀の京画壇」（京都国立博物館他編『京都御所障壁画―御常御殿と御学問所―』京都新聞社、2007年）は、19世紀の京都画壇における、「公」・「晴」の禁裏御用絵師系

- として土佐派・鶴沢派・京狩野派・勝山家・木村家を、「私」・「藝」の町絵師系として円山派・四条派・原派・岸派をあげるが、必ずしもそこに絶対的な格差があったわけではないことも指摘している。
- 18) 脇坂淳『京狩野の研究』（中央公論美術出版、2010年）、成澤勝嗣『もっと知りたい狩野永徳と京狩野』（東京美術、2012年）
  - 19) 曼殊院と立花の関係、堀口悟・鈴木健夫・村田真知子『江戸初期の香文化—香がつなぐ文化ネットワーク—』（文学通信、2020年）、狩野滋『近世の能楽』（わんや書店、1997年）の「京都御所の能」（56ページ以降）、山田淳平「近世大嘗会における雅楽曲再興」（『東洋音楽研究』81、2016年）、同「近世綾小路家の家職とその門人—神楽・東遊・催馬楽・朗詠・和歌講頌—」（『ピブリア』148、2017年）、同「近世武家雅楽の普及と展開」（『日本史研究』666、2018年）、『伏見宮旧蔵楽書集成』全3冊（明治書院、1989～98年）など参照。
  - 20) 岡佳子・岩間香編『寛永文化のネットワーク—『隔葉記』の世界—』（思文閣出版、1998年）など。近世前期の文化サロンについては、岩間香（町田香）氏の一連の研究がある。町田香「八条宮智仁親王サロンの主要な活動と構成員」（『ランドスケープ研究』66-5、2003年）、「後水尾院サロンと宮廷庭園の展開」（『ランドスケープ研究』69-5、2006年）
  - 21) 若松前掲（注9）論文。
  - 22) 若松正志「日本史上の親王・宮家に関する基礎的研究—近世の桂宮家を中心に—」＜平成25年度「新規研究課題挑戦支援プログラム」研究経過成果報告＞（『京都産業大学総合学術研究所所報』9、2014年）。飯倉洋一・盛田帝子編前掲『文化史のなかの光格天皇—朝儀復興を支えた文芸ネットワーク—』所収、飯倉洋一「妙法院宮真仁法親王の文芸交流—『妙法院日次記』を手がかりとして、和歌を中心に—」、鈴木淳「小沢蘆庵と妙法院宮真仁法親王」など。

#### （付記）

本稿は、京都産業大学2022年度「科研費再挑戦支援プログラム」E2205「近世朝廷の文化活動と交流に関する基礎的研究」（代表者：若松正志）の研究報告であり、また2023年度の科学研究費補助金基盤研究（C）23K00827「近世朝廷の文化活動と交流に関する基礎的研究」（代表者：若松正志）の成果の一部である。

文献調査にあたっては、本学図書館に所蔵してない図書も多く、いくつかは上記の研究費で購入することができたが、京都府立京都学・歴史館、京都府立図書館、京都府立大学図書館などの諸機関にお世話になった。感謝申し上げます。

また、これらの研究課題と関わって、2022年4月～2023年5月に一般社会人を対象に以下の講義を行った。

- ①「総論：京都の歴史のなかの観光・名所・文化—多様な資料と手法によるアプローチ—」（京カレッジ・京都力養成コース：「京都の歴史のなかの観光・名所・文化—多様な資料と手法によるアプローチ—」2022年5月7日、キャンパスプラザ京都）
- ②「総論：京都の歴史のなかの女性と政治・文化—人物研究事始—」（京カレッジ・京都力養成コース：「京都の歴史のなかの女性と政治・文化—多様な資料と手法によるアプローチ—」2023年5月6日、キャンパスプラザ京都）



# Toward the Advancement of Research into Early Modern Imperial Court Culture (Note): The Current State and Future Prospects of Research into Japanese History and Related Fields

WAKAMATSU Masashi

## Abstract

In the field of Japan's early modern history, research related to the Emperor and the Imperial Court has made great progress in recent years. As an example, details of the daily lives and cultural activities of the Emperor and court nobles have come to be understood alongside political and social matters such as the internal structure of the Imperial Court and the historical development of the relationship between the Imperial Court and the Edo Shogunate. However, in order to comprehensively understand the richly varied culture of the Imperial Court, it is important to study the viewpoints, methods, and outcomes of research in adjacent fields such as Japanese literature, art history, performing arts history, and religious history.

In recognition of that importance, this paper summarizes the current state of research in Japanese history and related fields as a first step toward advancing the study of early modern Imperial Court culture, and describes future prospects for such research.

**Keywords :** Imperial Court Culture in Early Modern Japan, Japanese history, Waka, art history, performing arts history

